

平成 30 年 11 月 2 日、政策秘書課職員に話した内容です。

## 市役所の限界

市民の方から「市長は、行事のあいさつ等で『市役所の限界』という言葉を使うが、具体的にイメージできない。どういうことでしょうか？」と質問され、一例として、次の話をさせていただきました。

市東部の大草、前熊、北熊と呼ばれる地域では、月 1 回、当番の人の自宅に集まって念仏を唱える制度が残っていて、日常的に隣近所とつながっています。今、市東部では、イノシシの被害が出ていますが、そうした際でも、個人が市役所に直接、「何とかしてほしい」と要望することは少なく、地区を代表する区長さんに現状を伝え、区長さんが意見をまとめて、市に対応策を要望するという形を取っていただいています。近隣でも多くの自治体では、こうした自治会等を中心にした要望の取りまとめの仕組みが残っています。

名古屋市に近い市西部は、隣近所や自治会で、困り事や要望を話し合うことは、あまり多くないように思います。

大災害の発生時、市役所からの情報を誰に伝えればいいのか考えたとき、市東部は、区長さんを中心として、地域や隣近所で対応することができるでしょう。

一方で市西部の多くは、地域と個人が密接につながっていません。そのため、個人が電話等で個別に市役所に情報を求めたり、市役所に対しても個々に要望を伝えたりすると予想されます。

大災害時、個人個人の要望に、市役所がひとつずつ対応することは不可能です。地域で今、何を優先すべきか、地域で順位を付けていただくことが必要になります。こうしたとき、個人個人の要望に対応できないことも「市役所の限界」の一例です。市職員の約 6 割は、市外在住です。事前に非常配備体制がとれる台風と違い、真夜中に地震が発生すれば、6 割の職員は、すぐさまに駆けつけることが困難です。これも、「市役所の限界」です。

長久手に暮らす市民のみなさんが、普段から、とにかく市内の誰かとつながっていてほしいと思います。そうした関係は、災害時だけでなく、ご自身が高齢になったときにもきっと役立つはずです。



～市長の話を聞いて～

先日の市内一斉防災訓練で、私が住む地域で一次避難所の公園に集まった人は、10名以下でした。40代男性の自治会長さんは、「参加者が、こんなに少ないとは思わなかった」とショックを受けていました。それでも、そこで集まった人達で、「公園で炊出し訓練をしたいね」と盛り上がり、「もう、開催日を決めてしまおう！」と3月に実施することにしました。

「あなた、市役所の人だから中心でやってね」と言われましたが、「いやいや、地震のとき、私は市役所に行ってしまうと、ここにはいませんよ」と伝えたら、「それもそうね」と言ってくださいました。次回の訓練は、何人集まってもらえるか分かりませんが、とにかく、第一歩を踏み出すことが大切だと思っています。